



SAIHIKA 201511

もくじ

です

表紙 SAIHIKA201511 「詩」 鴫和 1
目次 鴫和 2

【BF4】ゲームモードに
合わせて使いたい
おすすめ武器（脳筋用）—T.K 3



小説

「北の魔法馬鹿共外伝」
—マウス 10

「天球少女と生命樹『五』」
—矢野ヒカル 12

From writers..... 44



【BF4】ゲームモードに合わせて 使いたいおすすめ武器（脳筋用）

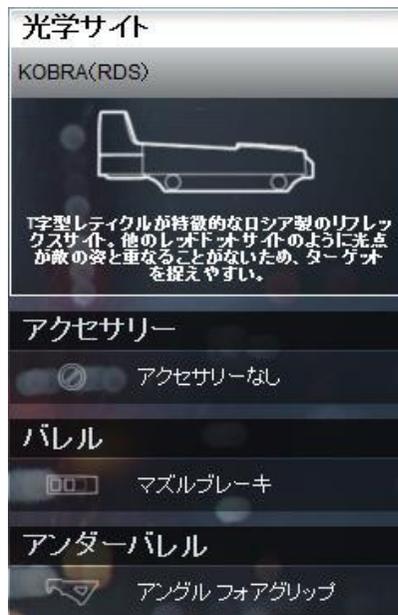
〇はじめに

以下に挙げるリストは歩兵戦大好きマン用です。援護兵、工兵、偵察兵のことは全く考えていません。僕がやるのはいつも突撃兵一択です。つまり脳筋です。敵に突っ込んでいってキルするものしかありません。というかロッカーやメトロで大暴れできるものに偏っています。

バトルレポートがこの有様ですが、それでも良いと言ってくれるモリモリマッチョマンはどうぞ。

最新レポート			
★	 Operation Locker - ギョクエスト (大) [JPL] NO G18 NO 93R PISTOL ONLY! 24/7 OP LOCKE...	2 日前 ラウンド時間: 19m 24s	勝利
	 Operation Locker - ギョクエスト (大) [JPL] NO G18 NO 93R PISTOL ONLY! 24/7 OP LOCKE...	2 日前 ラウンド時間: 26m 41s	敗北
	 Operation Locker - ギョクエスト (大) [GD] NO EXPLOSIVES CONQUEST LOCKER	2 日前 ラウンド時間: 40m 38s	勝利
	 Operation Locker - ギョクエスト (大) 24/7 PISTOL KNIFE ONLY! :: THE MEATLOCKER :: NO ...	3 日前 ラウンド時間: 1h 9m	勝利
	 Operation Locker - ギョクエスト (大) 24/7 PISTOL KNIFE ONLY! :: THE MEATLOCKER :: NO ...	3 日前 ラウンド時間: 1h 18m	勝利
	 Operation Metro 2014 - ギョクエスト (大) [NOOBS-R-US]- METRO MASSACRE : ALL WEAPON...	3 日前 ラウンド時間: 1h 7m	敗北
	 Operation Locker - ギョクエスト (大) [JPL] NO G18 NO 93R PISTOL ONLY! 24/7 OP LOCKE...	3 日前 ラウンド時間: 24m 10s	敗北
	 Operation Locker - ギョクエスト (大) [JPL] NO G18 NO 93R PISTOL ONLY! 24/7 OP LOCKE...	3 日前 ラウンド時間: 48m 5s	敗北
	 Operation Metro 2014 - ギョクエスト (大) # 4 TB=[Metro Only]=All Weapon=[AutoNuke]mtabfga...	4 日前 ラウンド時間: 33m 22s	勝利
	 Operation Metro 2014 - ギョクエスト (大) # 4 TB=[Metro Only]=All Weapon=[AutoNuke]mtabfga...	4 日前 ラウンド時間: 42m 58s	敗北

○コンクエスト（小）・チームデスマッチ・ドミネーション・ラッシュ その他小さいマップ



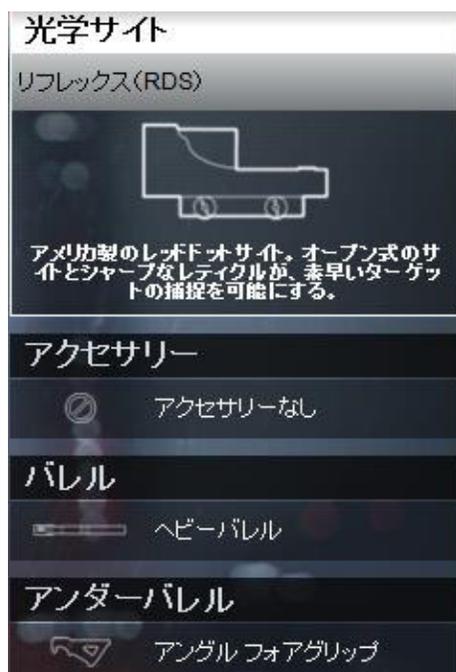
まずは SCAR-H。最近の愛銃ですな。敵が近距離にいるようなマップで、非常に重宝する。しっかり頭を当てていくとすごい速度で敵が死ぬので使っていて楽。別に頭が当てられなくても、真正面での打ち合いで勝てることが多い。僕の場合は特に不意な噛み合いでも HP ギリギリになるが勝てる。適当にやっても勝てる。それが SCAR-H なのです。ロッカーでは C での通路を挟んだ打ち合いで一瞬出て頭の位置に弾をバラ撒き、すぐさま引っ込むだけでキルがとれる。強い。素晴らしい。

ただし、ネックなのが装弾数。20 発（+1 発）と、かなり心許ないので 1 マガジン 2 キルくらいを目安にして早めのリロードを。しかしこれのせいで元々リロード癖があった僕は、さらにリロードの最中にキルされる場面が加速したのでそういう癖がある人は気をつけて、どうぞ。

実際にメトロで使うと下のようになる（数日前の好成績を引っ張ってきたけど K/D は 3 くらいで安定する）。撃って引いてを繰り返すだけの簡単なお仕事です。みなさんも是非、どうぞ。

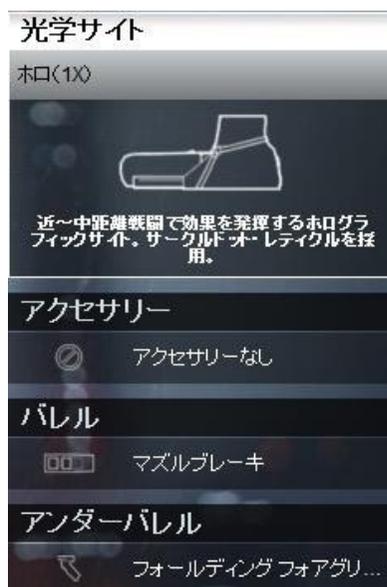
スコア	SPM	スキル	キル	死亡	キル/死亡率	命中率
 合計 31,203	945	+27	47	9	5.22	21%
	ベストクラス		ベスト武器		ベスト車両	
	+				N/A	
突撃兵	18,403	SCAR-H	44			

ちなみに遠距離でもかなり当たる。ACE23 ほどではないけど、しっかり 2 点から 3 点くらいでタッグ撃ちをするときっちり当たってくれる。HP100 の相手でも驚くほど早くキルできることもある。けど、調子に乗って SR と真正面から対決すると死ぬるので注意。

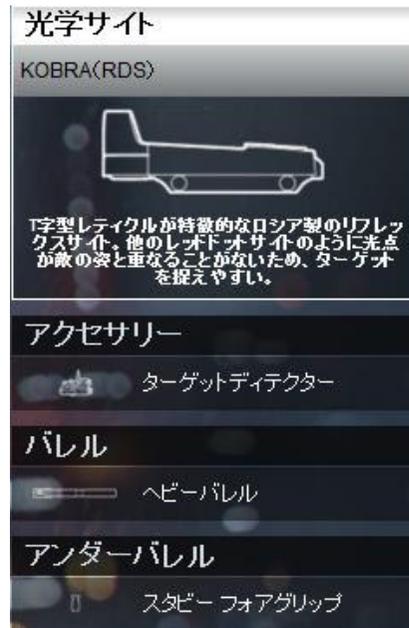


次に BULLDOG。また装弾数が少ないね。でも高火力なやつって軒並み装弾数低いから仕方ないね。こいつも基本的には SCAR-H と同じ運用方法でいける。ただ反動が SCAR-H よりも大きいと個人的には思う。数値でみると違うかもしれないけど（wiki で調べると、SCAR-H の反動合計が 95、BULLDOG の反動合計が 124）。

これは SCAR-H にも言えることだけど、ロッカーで大勢の敵の裏を取った時に倒せるのはせいぜい 3、4 人というところ。それでも十分というのはわかっているのだけれど、こういうときに LMG が欲しくなるところ。という貴方に LSAT。



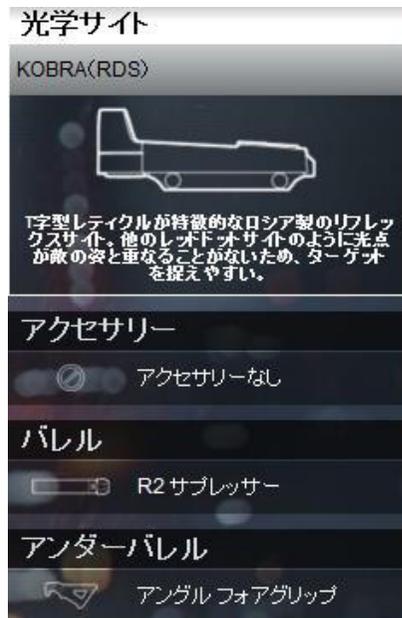
僕はごくたまーにしか使わないけど、たまに使うと 20 発撃ったらリロードあつ、強いなって思います。突撃に疲れた時にロッカーの D にある医務室で柱の陰から連射するのがオススメ。



あとは序盤のお供、ACW-Rといったところでせうか。何が強いかって、ターゲットディテクターが強い。これがあるだけでカービンを使う意味ができるほどには強いと思います。普段 Q キーをカチカチカチカチ押しまくっている人にはたまらない一品。

そんなカービン群の中でも、レートが高いのがこの武器ですな。最初、カービンをアンロックしていたためにレートだけで選んだこの武器でしたがすっかりハマってしまって ACE23 が出るまではずっとこれを持って突撃兵をしていました。何を血迷ったのか、偵察兵をアンロックするためにこの武器を担いで出撃したこともしばしば。最近は SCAR-H に出番を取られてしまってめっきり使っていないけど、説明をしているとまた使いたくなってくる。

次ページへ。



広いマップではやっぱりこれ、ACE23 くんです。サプレッサーがついているのはオペレーション・アウトブレイクのせい。あのマップでサプレッサーをつけて野山を駆けまわってるだけで野生の気分が味わえます。普段はマズルブレーキをつけております。マズル・アングルの組み合わせにすると敵に弾が吸い寄せられていく。いやほんとに。

他にはシャンハイでも活躍してくれる。ここで使うとかなりの長距離でもビシバシ当たるのでビル上でもいもしているクソ芋 SR のみなさんへの牽制に使える。ただ、調子に乗ってマークスマンもらうことが多々。悲しいね。

最近あまり使っていないこの武器ですが、キル数は全武器でトップ。しかし NOOB 時代（今は準 NOOB）に使っていたのでキル/分と命中率はあまり芳しくない。SCAR-H や BULLDOG といった単発高火力をよく持っているせいで、キルしたと勘違いして撃ちやめてしまうことが増えてしまって今も封印してある。ただ、夜の ZAVOD なんかでボコボコにされるとキレて使いはじめる。

○ハンドガンサーバー



正直に言うと、これを書きたかっただけ。遠距離のところは ACE23 しか紹介されてないって？ そもそも広いマップへ行くときは ACE23 か SCAR-H 以外担がないのでどんな武器がいいのかわからないです。

というわけで伝説の初期ハンドガン、P226。

スコア	SPM	スキル	キル	死亡	キル/死亡率	命中率
合計 90,255	1671	+26	123	43	2.86	24 %
	ベストクラス		ベスト武器		ベスト車両	
	+				N/A	
	突撃兵	41,455	P226	89		

明らかに死にすぎだけれども、初期ハンドガンだってこんなに強い。秋のアップデートが来た頃くらいにアメリカのハンドガンサーバーが G18、93R 禁止になってしまって、さらには 11 月頭くらいに日本サーバーでも禁止され、ついでに DEAGLE44 すら禁止されてしまった。そういう環境でこの K/D だけど、G18 が禁止になっていなかったころでも十分に戦えていました。わりと撃ち負けてたけど。

さて P226 のどこが強いのか？ それはリロードの速さと装弾数、精度にあります。まず継戦能力が非常に高いというところが大きい。ロッカーでの C の螺旋階段の取り返しのはきは、リロードの速さでゴリ押しして行ける。弾が切れると少しだけ戻って、すぐに駆け上がる。これがとても捗る。敵の裏を突いた時も、ハンドガンサーバーは夢中で前を撃っていて気付かない人が多いのでリロードの速さにかこつけてうまく行けば 5、6 人は倒せます。それだけ倒すと味方も突撃してくれるので、死んでも蘇生がくるおまけ付き。

やっぱり最高やな！ P226！

○さいごに

#	武器	スター	解除アイテム	キル/分	命中率	キル
1	 ACE 23	★ 37		1.15	15.42%	3,708 58h 31m
2	 SCAR-H	★ 16		1.33	16.18%	1,655 20h 45m
3	 AEK-971	★ 11		1.04	12.87%	1,161 18h 34m
4	 DAO-12	★ 7		1.78	67.02%	721 8h 44m
5	 G18	★ 7		1.5	14.98%	714 7h 57m
6	 ACW-R	★ 6		1.1	14.65%	652 9h 53m
7	 P226	★ 5		1.79	22.54%	579 5h 22m

キル数が少ないのは仕様です。いかにも脳筋らしいラインナップですね。階級もまだ 114 というクソザコナメクジですが、以上オススメ武器でした。

SAIHIKA 発刊当初から小説小説アンド小説で、たまには変なこともしてみようと思ひ、今回はこんな感じになった次第です。嘘です。課題に追われて時間がなすぎで短時間でクオリティを稼ごうと思うところになりました。好きなことを好きなだけ書いていただけですが、こんなところまで読んでくれた方には除細動器と回復パックのプレゼントを。もちろんちゃんと HP100 蘇生です。明らかに撃たれまくっているところで HP20 蘇生するやつは BF しないでください。

ではまた次回。

全く関係ありませんが、ざくざくアクターズ、コラボレーションカフェおめでとございます！

その道が交わるまでに」

「北の魔法馬鹿共外伝

マウス

少女と獣が、間合いを取りつつ向かい合っていた。

林の中の拓けた一角。お互いに、数歩飛ばせば相手へと届く距離。

少女は微動だにせず、眼前の黒い獣を隣きもなく見つめていた。既に向かい合ってから短くない時間が経過している。

獣の方はと言うと、荒く息を吐きながら睨め付けるように少女へと鋭い殺意の眼光を向ける。

それから一刻置いて、遂に獣が少女へと飛びかかった。素早い加速から少女の細く柔らかい首へと牙を剥く。

しかし、首から血を流し斃れたのは、獣の方であった。

少女の右手が血に濡れる。その腕は、丁度彼女に襲い掛かった黒い獣と同じ様な、猛獣のそれであった。

「……やったか、にや」

ふう、と少女が息を吐いて、固かった表情に人らしい柔らかさが戻った。

「よくやった。おめでとう、ミーシャ」

「お父さん！」

林の陰から、一人の男が顔を出した。その姿を見るなり、ミーシャが男の胸へと飛び込み、二人が抱き合った。

「これで、お前も一人前だな」

「これからはお仕事もお父さんと一緒だにや！」

ミーシャの父は、愛する娘の成長を喜びながら、その頭をゴツゴツとした大きな手で撫でる。

その様子を見ながら、もう一人の男が現れた。

「よくやったなミーシャちゃん。いやしかし、その年で大したものだ

よ全く」

「クラウドおじさん！」

「ミーシャなら出来る！ とか言うくせに、グインのやつ心配しすぎて今にも飛び出しそうだったから、止めるのに苦労したよ」

「よせクラウド。父の面目ってモンがあるだろう」

「大丈夫にや。お父さんがミーのこと大好きなのは知ってるからにや」

「だ、そうだぞ」

「ぐぬぬ。おませさんになったなあミーシャは」
グインが頭を掻きながら苦笑いを浮かべる。無事に任務を終えた三人は街へと帰って行った。



「じゃあじゃあ、明日からミーちゃんもパパたちとお仕事行くの！？」

「ま、そうなるかにや」

「すごいすごい、と声を上げてはしゃぐ少女は、クラウドの娘であるクラウドだ。」

グインとクラウド、町を外敵から守る二人の戦士には、丁度同い年の娘がいた。それがミーシャとクラウドである。

「すごいね！ 私なんか、何にもできないのに……」

「そんなことないにや。クラウドは料理が上手だし、私よりずっと頭もいいにや。それに、私が戦士になれるのは私が獣人の血を引いているからにや。こればかりは、頑張りとかで埋まる差じゃないにや」

「そうだね。私は私のやれることをやればいいもんね。体を張って戦うパパやミーちゃん、グインおじさんの為にも」

「にやしにやし。帰ってきて美味しいご飯が待ってると思えば、お仕事にも精が出るってもんだにや」

グインとクラウドはこの町で生まれ育った古くからの友人で、その

友情は種族の垣根を越えて二人を結んでいた。そしてそれは、彼らの娘たちにも受け継がれている。

「おい、お前が戦士として認められたって本当か？」

町中で話していた二人に、少年が突然割って入ってきた。

「ラッツか。ホントだにや。私も明日からお仕事にや」

「どうせグインのえこひいきだろ。クソツ、ケモノの癖に」

「ラッツ君。その言い方は良くないよ」

「気にすることないにやクラハ。どうせこいつには何も出来ん」

「くっ、言わせておけば！ 欲に忠実なケモノの分際で——」

「おい、それは私だけでなく父をも侮蔑しているのか？」

ミーシャに睨まれたラッツは、背筋が凍りつくような感覚を味わいながら、それでも負けじと彼女へ睨み返す。

「だってそうじゃないか。この前の盗賊団、中にはケモノがいたって父さんが」

「ふん。その理屈なら、団の大半を占めていた人間はもつと強欲な生き物だにや。どんな種族にだって良い奴悪い奴がいる。当然だにや」

「……………ッ！ クソツ、いつか絶対化けの皮が剥されるんだ！ 今に見てろよ！」

言い返すことも出来なくなったラッツは、顔を真っ赤にして捨て台詞を残し走り去った。

「ラッツ君…………。少し前までは、仲良くしていたのに」

「仕方ないにや。この前の盗賊団に、父親が大怪我させられたらしいから。それよりミーが怖いのは、最近町を覆っている、嫌な雰囲気」

ミーシャが辺りを見回す。多くの人は挨拶をするか、あるいは声もかけないかだが、一部の町人がミーシャへと悪意の視線を向けているのを彼女は気にかけていた。

「町長さんが変わってから、だよな」

「あのセイ国かぶれのボンクラ息子め。まさかあそこまであからさま

に仕掛けてくるとは」

セイ国とはつまり西国であり聖国である。西大陸の宗教国家、かの国の国教では、人間は神に最も近い生命であり、神の次に位置するものとされている。言い換えれば、獣人や魔族といった亜人は人の下にいるべき存在とされているのだ。

この町は北大陸アールズの中でもかなり西との国境に近い。少なからず影響を受けていることは多く、去年新しい町長となった前町長の息子が西との積極的交友を進め始めてから、町内での対立がはつきりと浮き彫りになりつつあった。

新町長と彼に与する親西派と、彼のやり方に嫌悪感を持つ反町長派。現状両陣営の人数に大きな差はなく、どちらにも付かない、あるいは勝ち馬に乗ろうと傍観する者の存在もあり、一度選ばれた町長が選挙によつて免職される確率は現状まずない。

「私は、ずっとミーシャちゃんの味方だから」

「…………うん。ありがとにや」

ミーシャの不安は、見事的中することとなる。この町を取り巻く厄介ごとが一斉に芽を出そうとしていた。

続く

天球少女と生命の樹

シナリオ：矢野ヒカル

佐藤廻子(さとう めぐりこ)はお兄ちゃんの事が大大だーい好きな女の子。
不登校なのは仕方ない、だってそういうオンナノコだから、ね。

些細な変化から私はもう一人の自分がいるのではないかと疑う。だが、実際はそんなことはなかった。ただ、お兄ちゃんが私に変装していただけだった。

なんとか君の卑劣な罠で(見事)退学になった私達。

そして二人で温泉へ行って、二人の中に進展ありかと思いきや、お兄ちゃんはヘタレの子キン南蛮野郎だと判明。

温泉の帰りの電車で倒れてしまった私。すっかり弱ってしまった私は妄想に取り憑かれ、あわやというところまでいくが、なんとか立ち直る。

お兄ちゃんからついに本当の気持ちを聞くことが出来て、ハッピーエンドかと思いきや……。

どうやら、まだ終わってくれないらしい。

相思相愛ということを理解し、納得した二人。

体験、色眼鏡、運命……。

不登校と登校。

足りないあと少しを求めて……。私達は、いつもどおり、言葉を交わす。
ちょっぴり増えた愛と共に。

『落ち込んでる所悪いが、廻子が双子の妹だとわかって……お前の想いはどうなんだ？』

「……」

「もちろん、変わらねえ。俺は廻子のことが好きだ。愛してる」

『それだけで十分じゃねえのか？』

「そうだな……そうだったな……」

『ふん……』

「お母さん！」

『何だい？ 改まって？』

「母さん、俺は、あんたの娘を頂きます！」

『頂くのは構わねえさ。ただ……』

『あの子を泣かせたらたまたじゃおかないよ』

「承知！」

『それに、廻子にも伝えておいてくれ、私の息子を泣かすなよってな』

「それも承知！」

『前は冗談で孫の顔が見たいだなんて言ったが、お前が本気だとわかった今、そんな事は許されない』

「ああ……」

『じゃあな、バカ息子とバカ娘。たまにはこっちに顔出せよ』

「わかった。廻子にも伝えておく」

「廻子、衝撃の事実だ」

「何？」

「俺とお前は実の兄妹、それも双子だ」

「知ってたけど？」

「！？」

何を話してたんだか……。

顔見れば一発でわかるじゃない……。

「え、お兄ちゃん知らなかったの？」

「うん」

えええ……。

どうしてだよ。

「なんで？ 馬鹿なの？」

「ばばば馬鹿じゃないし。よーく考えてみろ廻子、俺達が兄妹ってそんなこと……」

「いやあ、何回も言ってたじゃん。兄妹だって」

「それは『義理の』という言葉が省略されていてだな」

「いないんだなあ」

「それにさ、よーく考えてみる廻子」

考えてみなくても分かるよ……。

「俺達が、兄妹だと、示している、証拠は、ない」

「顔」

「……」

おしまい。

「他人の空似、みたいな？」

「馬鹿なの？　なんで実の兄妹じゃなくてそう考えちゃうの？」

「……」

まあ、馬鹿なんだろう。

仕方ない仕方ない。

でも、そんなお兄ちゃんが犬……

「廻子。話さなくてはならない事がある……」

神妙に、それこそ「告白」してくれた時のように。

「一つ、それらしいものある。俺が義理の兄妹と信じてやまなかった理由が」

……。

私も、真剣に聞き入る。

「それは、昔の話。俺は、鏡を見ていた」

「その時、俺は気づいた。俺の顔は廻子に似ていると」

いつの話かは知らないけど、その時点では気がついてたんだ……。

男女の性差はあるけど、お兄ちゃん中性的な顔なんだよね。

「ウィッグ使ったらほとんど廻子と同じになるんじゃないか、とも思った」

事実、凄く似てる。

「そしてひらめいた」

何を？

「何を？　そりゃあ、簡単な話さ」

「つまり、廻子のえっちな画像を生成し放題だと……」

……。

「局部さえ隠せばほとんど一緒だ」

「いやいや、そんなことはない。俺は男で廻子は女」

「女装した俺はキモいだけだろ」

「そんなことも思いながらとりあえずやってみた」

「廻子の服を拝借」

「着た」

「廻子の良い匂いがした」

「ちょっと服をはだけさせた」

「写真を撮った」

「見た」

「そして、こう呟いたのさ」

「やはり俺は天才だ。ってね」

「そこからは量産体制に入った」

「カメラアングルの勉強もした」

「男の部分を隠すために画像編集も学んだ」

「やれることは全てやった」

「そうしていつしか、俺と廻子が兄妹だなんて考えもしなくなったんだろう」

「実の妹といちゃいちゃちゅっちゅするわけにはいかないからな」

「さすがに俺は血縁度が濃くなるに連れて興奮する変態ではない」

「こんなことを話すと俺がエロエロ大魔神だと思うかもしれない」

「廻子を欲望のはけ口にしていると思うかもしれない」

「違う」

「そうじゃないんだ」

「俺は、廻子を想っているから、こんなことをしたんだ」

「廻子以外の女は正直どうでもいい」

「他の雌の裸を見るくらいならカブトブシの交尾を見たほうがマシだ」

「廻子以外など興味ない」

「俺は、お前でしか、興奮しないんだ……」

.....

.....

.....

...

「ド変態じゃねえか……」

泣いた。

泣いた。

私は泣いた。

「ド変態じゃねえか……」

なんでだよ。

どうしてそうなるんだよ。

原因も過程も結果も全ておかしいじゃねえか……。

「ド変態……じゃねえか……」

「ド変態……ド変態……」

「ド変態パンチ！！」

「グボオオツ！！」

「ド変態キック！！」

「グボオオツ！」

「ド変態……ってこれじゃあ私がド変態みたいじゃん！！」

「ばかばかっ。お兄ちゃんのばか！！」

ポカポカ。

「ちょっと待ってっ。ポカポカってレベルの攻撃じゃっ……ない……」

「ばかぁ。ヘンタイっ。性欲の化身っ！ 妹に興奮するのはわかるけど一むしろ推奨したいけど一妹に扮した自分に興奮するって、どうなのよ！！」

ポカポカ。

「お兄ちゃんの愚種！ 見た目は廻子、頭脳は下半身っ！ しかもその結果、兄妹の絆は忘却の彼方へ。ってどうということ！！」

ポカポカ。

ポカポカ。

「お兄ちゃんのばかぁあああああ」

ポカポカ。

……………

……………

………

...

『めぐりこ、おおきくなったらおにいちゃんのおよめさんになるー』

『それじゃあぼくはだんなさんだね』

『HAHAHA テメーらは結婚出来ねーよ』

『母さん、そこは別の言い方あるでしょ』

『お兄ちゃん……最近仲良くしてくれない……嫌われちゃったのかな……ぐずん』

『んほおおおおお！！ 廻子のぱんつゲットオオオオオオ！！！！』

『お兄ちゃん的笑顔を見ると、胸の奥が痛い……。この気持ち、ひよっとして……』

『でゅふふふ、廻子よ。下着を選ぶ時には見栄をはらずに自分に合ったサイズをだな……』

『佐藤ちゃん！ 佐藤ちゃんは好きな人いる？』

『お兄……じゃなくて！』

『オニイ？ オニイって人が好きなの？』

『いないいない！ 好きな人なんかいないって』

『クソッ。PC のスペックが足りない……。廻子イメージビデオ(主演:俺)の完成はあとちょっとだというのに』

.....

.....

.....

...

「言い飽きた」

「変態って言い飽きた」

「甲斐性なしも」

「意気地なしも」

「ヘタレも」

「チキンも」

「全部全部、言い飽きた！」

「私は！ お兄ちゃんの事好きだから、さ。お兄ちゃんには自分のことを第一に考えてほしいよ」

「全て私の為に捧げる事を求めているわけじゃない」

「でも」

「でもさ」

「ちょっとは私のこと考えてくれてもいいじゃん！」

「さっきからさ、お兄ちゃんは自分の下半身のことはばかり考えてる」

「どれだけ下半身に血液を集中させたら気が済むの？」

「そういうことしちゃ駄目だなんて言わないよ」

「訂正、女装した自分に欲情するのは駄目」

「理由？」

「簡単。すごく当然」

「実物ここにいるじゃん！！」

「あなたの目の前にいる、あなたのことが大好きな、そしてあなたの大好きな女の子がいるじゃん」

「その女の子に一言『好き』って言えばいいだけの話じゃない」

「そしたら、下半身だけじゃない。上半身も幸せになるんだよ」

どうして、上手くいかないんだろうね。

最初から相思相愛なのに。

チキンで、

ヘタレで、

意気地なしで、

甲斐性なしで、

そしてとびきり変態で、

でも、最初から、ね。

理由とかは、いいよね。

この気持ちが、今は。

そう。

どうしてかなあ。

やっぱり、オンナノコだからかな。

「ともかく！」

「『好き』って言葉はこの前聞いたから……」

「言葉だけじゃ伝わらないこと、あるよね？」

「そ……それは、め、めめめ廻子……？」

「ふふっ、お兄ちゃん、どうしたの？」

「一人でするよりも、二人で一緒にするほうがもっとキモチイイよ」

「って、そんなこと私言わない！！！！」
「あまり怒るな廻子、ハゲるぞ」
「お前がハゲろ……。私と同じ声で変なこと言わないでよ……」
「すまんすまん。HAHAHA」
HAHAHA じゃないよ……。
まったく、これだからお兄ちゃんは……。
「ともかく！」
机を叩いて立ち上がる。
お兄ちゃんを睨みつける。
「こんな変態放っておけません！」
今度は、私が、私の声で力強く。
「だからと言って下半身的なことはしません」
「えええええええ……」
「少年誌ですよ。何を言ってるんですか！？」
「廻子こそ何を言っているんだ……」
「というわけで、廻子による厳重なお兄ちゃん監視体制を敷きます」
「ごくり……」
「下半身的な事は起こりません！」
「がくり……」
「でも、何をやるにしても一緒です。廻子はお兄ちゃんの部屋で生活します」
「ガッ！」
「でもでも、下半身的な事は起こりません！！」
「がくり……がくがく……」
「でもでもでも、ずっと一緒です。ベタベタです」
「ドドーン！！！」
「でもでもでもでも、下半身的な事は起こりません！！！」
「がく……がくがくがく……ぴくっ……がくり……」
うるさい！

お兄ちゃんの部屋。

室温、28度。

私とお兄ちゃん。

向かい合い、正座。

「なあ廻子、これはどういう……」

「考えた。色々」と

「なんでこんなに上手くいかないのか」

「どうして『相思相愛、ハイ終わり』じゃないのか？」

「やっぱり、コミュニケーション不足なんだよ」

「だから、しようよ」

「それってこれまでもしてたよな」

「そう。でもまだ不十分。それじゃあ不十分。だからレベルアップ」

「言葉を交わすだけがコミュニケーションじゃない」

「対話じゃない」

「言葉と言葉じゃなくて、こう……」

お兄ちゃんのほっぺたに右手を伸ばす。

体温は、おなじくらい。

「グルーミング」

「ちょっと動物っぽいけど、要するに、肌と肌で語る。もちろん言葉とともに」

「ボディタッチ。こうすると、多分もっと良く分かる。お互いのこと」

「そうだな。言葉を持たない動物がなぜコミュニケーションを取れるのか……それは物理的接触。考えたな、廻子」

む、ちょっと引っかかるぞ。

「動物が言葉を持たないのは独断的。それに言葉は音なので物理的接触といえば物理的接触」

「う……、そうだな。ま、まあ、あれだ。廻子公認で身体を舐め回せるのは嬉しいな」

「にゃー！！！」

「あっ、つい本音が！」

「下半身的たっちは無し。たとえ触れるのが上半身でもお兄ちゃんが下半身的ならアウト！」

「つまり、どういうことだ」

「胸を触るな。尻を触るな。舐めるな」

「あう……」

「破った場合……」

「破った場合……？」

「……」

「……？」

「特に何も無い」

「えっ、それでいいのか？」

「罰則は規定しない。ただ、ルールを破ったという事実だけが残るんだよ……」

「私は何もしないし、何も言わない」

「お兄ちゃんに罪の意識が、残る」

「でも、罪を罪だと認識できないような不良品だった場合……」

「壊す」

「ということで！ 対話篇ばーじょん2。はじまり～～♪」

「ふうあい……」

お兄ちゃんが錯乱している……。ちょっとやり過ぎたかな？

でも、これぐらいしないとだめだよな。

てへ。

てへてへ。

両手を、お兄ちゃんの頬に。

掌二つで、サンドイッチ。

「ルール説明。思ったことは口に出そう」

「廻子は貧乳！」

「ド変態抹殺プレス！！」

パチンッ！！

「痛いッ」

両腕を広げて、思い切り頬を打つ。

「思ったこと口にしただけじゃん」

「違う……違うんだよ愚兄……」

「ともかく、仕切り直し」

「さっさとやろう」

「もう間違えないように、ね」

「さっき廻子は貧乳とか言ったけど、まあ別にそれはいいんだよ」

「いいのかよ！？ だったらなんで殴ったんだよ」

「なんとなく……」

「なんとなくってなんだよ！」

軽くチョップされた。

「あう……。でも、感謝した方がいいよ」

「何に？」

「ちっちゃいのに」

「なんで？」

「廻子のお胸様が小さいからお兄ちゃんは女装して自給自足自家発電が出来たんじゃないの？」

人差し指でお兄ちゃんの鼻を押す。

「う……。そうだな」

「ふふん」

得意気に笑った。

「廻子の洗濯板の如し胸板に感謝。揉ませろ」

手をワキワキさせる。すごい犯罪的。

「お兄ちゃんの手から下半身の気配が消えたら、いいよ」

「つまり駄目ってことか」

「そういうこと。よくわかったね。えらいね」

頭に手を置く。

「馬鹿にされているみたいだな」

「馬鹿にしているんだよ。おにーちゃん」

頭を撫でてあげる。

「でも、それって胸が小さいことは認めるんだな」

「客観的事実。それは当然」

「廻子は胸の小ささを気にしてなかったか？」

ぎくり。

「いやいやいやいや、ソナコトナイヨ。てゆーか？ それはネタだよ。ネタ。お胸が小さいオンナノコはみんな胸の小ささを自虐してネタにしているんだよ。そうして哀れみの視線を向けられるんだよ。みんな悲劇のヒロインを気取りたいんだよ。エヘヘ」

「凶星だな。可愛いやつめ」

撫でられる。頭を。

「いいもん。廻子は身体じゃなくて心で生きてるからいいもん。心のお胸様はおっきいからいいもん」

「心のお胸様……か」

「そうだぜ。ばいんばいんだぜ」

ぴょんぴょんと跳ねてみる。

身体の方は揺れなかったが、心の方はそりゃあもう大惨事ですぜ。

「言い訳がましいな」

「言い訳じゃないよ。心の目で見てよ！」

「目で見えるものなのか？」

「目じゃなくて、心の目」

「心眼……」

「そう。目を閉じて想像してみて。胸が大きくて可愛い女の子を」

「……想像した」

「それが私です」

「違うぞ」

「私です」

「違うぞ」

「私」

「違う」

「じゃあその女は誰なの!？」

立ち上がり、指差し、睨みつける。

「ええええ……いや、その、ね」

「私以外の女を想像していいと思っているわけ????」

「はい?」

「お兄ちゃんは私以外の女を想像できない→つまり今想像している巨乳美少女は廻子」

必至の剣幕。

「……………」

「……………」

「……………」

「まあ、そういうことにしておこう……」

「勝った。つまりは廻子は巨乳、と」

「すごい不服だが、そういうことだ」

満足して、座る。

「よくぞその結論に辿り着いた。褒めて遣わす」

撫で撫で。

「ま、嘘なんだけど、ね」

「嘘なのか……」

「でも、ある程度は本当」

「もう俺は何が本当で何が嘘かわからないよ」

撫で撫でしている手を、後頭部に持っていく。

両腕で、包み込むように、頭に手を回す。

私の口も、耳元に持っていく。

「廻子は心で生きてるの。だから、胸の大きい小さいは関係ないの。胸の大きさととやかく言う人間は総じてちっちゃいんだよ。器が、ね」

「お兄ちゃんはどう? 器、おっきい?」

「そうなるように努力しよう」

耳元で囁かれるのはくすぐったいからか、恥ずかしそうに答えた。

「それにしても、心で生きているのか……。それってどうなんだ？ 身体が無いと生きていけないと思うんだけど」

「そうですね。じゃあ、考えてみよっか」

「心と身体。果たして心ってどこにあるんだろう？ そして、身体も」

頭を包んでいた腕を背中に移動させる。

「こうやって、触ることが出来る。それを身体と仮定してみる。じゃあ、心は？」

「触れないもの、ということか？」

「そうかもしれないね。でも、ここで一つ問題発生。触るってどういうこと？」

「物理的接触の事。とでも言ったらいいのかもしれないが、どうだろう」

「では、物理的接触、とは？」

「触れたという感覚刺激が脳に伝わり、触れたと認識する。これでどうだ」

「そうだったとして。脳が誤作動を起こし、触れていないのに触れていると認識してしまうこともあり得るね」

接触という事実はどこに存在するのか？

試しに手と手を合わせてみよう。

右の掌と左の掌が「接触」している。

「接触」していると認識している。

脳が無ければ接触したかどうかはわからない。

「そうだな……。それに、心も脳の化学反応の結果だとしたら、接触したという認識も心的なものになってしまう。……。アレ。なんか俺、混乱してきた」

「えっと、心は脳に起因する。接触したという認識も脳に由来する。じゃあ心と接触の差、つまりは心と身体との差がなくなってしまう。俺が言いたいのはそういうことだ」

「ふむふむ。理解。じゃあここで選択できるのは、」

「一、心と身体に差はないと認める」

「二、心も脳、身体も脳に由来するが、脳の場所が異なる」

「三、心と身体に差はないと認められないので、前提条件を見直す」

「四、心と身体に差はないと認められないので、結論の導出過程を見直す」

「五、心と身体について語るのを止める」

「私は三を選択する。前提条件、つまりは心が脳にあるということを私は認めない」

「じゃあ、どこにある？ 文字通り『心』臓か？」

「どこにもない。いや、違う。どこにあるかという問いに意味は無い」

「あ～なんか廻りっぼくなってきたな。それで、その心は？」

お兄ちゃんから離れて、自分の胸に手を置く。

「たぶん。心は心で身体は身体。そんなに難しい思考は必要ないと思うんだ」

「ほう……」

「前提から結論を導く、演繹は科学的だけど、もっと科学的な帰納法で考えてみる」

対話。

心と身体。

どうして、今、こんなことをしているのか。

お兄ちゃんとの相互理解度を上げるため。

相思相愛というだけでは乗り越えられない壁を超えるため。

どうして、今、こんなことをしているのか。

お兄ちゃんの変態だから。

女装した自分に興奮してしまう変態だと分かったから。

私は、女装したお兄ちゃんを認めたくない。

女装したお兄ちゃんは廻子そっくりだから。

「お兄ちゃんが女装したお兄ちゃんに取られちゃう。という嫉妬か？」

んー、違う、かな。

たとえば、さ。

お兄ちゃんが女装したとして、それが私に似てなかったら興奮しないでしょ。

「そうだな」

私と女装したお兄ちゃんがほとんど同じ見た目をしているのは、過去の実験により確かめられているね。

私もそうだと認めてるし、お兄ちゃんもそうだと認めてる。

身体に関しては同じ。

まあ、身体のぷにぷに度は違うけど。

「ほんとにそうなのか？ 試してみる必要があるな」

ふいふ……。

お兄ちゃん……。

「ひっ」

まあいいよ。

二の腕ぐらいなら触っても。

ぷにぷに。

「おお、ありがたいありがたい……」

私もお兄ちゃんの二の腕、触るね。

「俺のものに比べて格段に柔らかいな。当然だが」

うん。

人間の男女の性差だね。

皮下脂肪の割合。

女の子の方が多い。

でも、皮下脂肪が多ければ女性とは限らない。

それに、触らなければわからない。

だから、これは、些細な違い。

触れなければわからない。

だから、私は、気が付かなかった。

最初、ね。

「俺が廻子に扮して学校に行っていた時の話だな」

うん。

あの時はちょっと早とちりしすぎた気もするね。

「そうだな。包丁持ってて……怖かったぞ」

何度も言うけどアレの原因作ったのお兄ちゃんだからね。

「反省。両手を挙げて反省のポーズ。反省」

うん。いいよ。

もういいんだよ。

だから、反省。

私も、反省。

両手を挙げて反省。

包丁持ってたのはやり過ぎだったと思う。

誰かを殺しそうになったのも、やり過ぎ。

「なあ廻子、どうしてあんなに取り乱していたんだ？」

「理由はわかる。俺が作ったんだから。でも、完全には納得しない。廻子も言うとおりのやり過ぎじゃあないのか」

そうだよな。

そうだよ。

うん。

うん。

それは、心と身体。

女装したお兄ちゃんは私と等しい。外見上、身体においては、
身体の同一。

でも、それは、私じゃない。

私は、心で生きているから。

心が同一じゃないと、廻子とは言えない。

廻子は進んで学校に行かない。

廻子には友達が沢山いない。

廻子は友達とカラオケボックスに行ったりしない。

廻子は、そんな考えを持たない。

廻子は、そんな心を持っていない。

廻子は、そんな人間じゃない。

廻子は、決して、女装したお兄ちゃんじゃない。

どれだけ見た目が同じでも。

心が、

そう、

心が違えば、それは、別の人間なんだよ。

心が違うのに、身体の同一性のみを引っ張りだして同一人物だと云うこと。私はそれに耐えられない。

廻子はお兄ちゃんを好きになる。

お兄ちゃんは私を好きになる。

私の心を好きになる。

私の姿形が変わっても好きになる。

たとえ、私の見た目が変わっても、好きになる。

私の身体が変わっても好きになる。

そういう意味では、

私以外を好きになる。

認めてあげましょう。当然です。

廻子の心を好きでいてくれるなら。

廻子は、心と身体の区別がついてますから。

でも、

「私」

「私」を好きになる。

その「私」は見た目は私と同じ。

でも、心が違う。

そんなものを好きになるのは、許さない。

代替品じゃ許さない。

だって、それは廻子じゃないと知っていますから。

身体は同じ、されど心は異なる。

そんな存在は、

認めませんよ。

だって、廻子は廻子ですから。

廻子は身体ではなく心で生きているんですよ。

私は、この姿じゃなくてもいい。

お兄ちゃんも、その姿じゃなくてもいい。

私は、お兄ちゃんの心を好きになったから。

話を戻します。

心と身体。

その違い。

見えるモノが心だと私は思う。

「逆じゃないのか？ 物理的な身体は目に見えて、精神的な心は見えない。そうじゃないのか？」

うん。違う。それに、私は心が見えると言っただけで、別に身体が見えないとは言っていない。

でも、その疑問は想定内。

だから、まずは用語確認。

つまりは用語の自己紹介。

自分の目で見えるもの、つまりは世界。

自分の、世界。

世界そのものではなく、自分の目で見える自分の世界。

世界そのものは誰も見る事ができない。

何故か。

人は誰も色眼鏡を掛けているから。

色眼鏡を通してみると、当然世界は色付いて見える。

色付いた世界が、自分の、自分だけの、世界。

見えるものは世界。

自分の世界。

そしてそれは、「目」を閉じていても……。

この場合の「目」は身体的なモノ。

眼球、まぶた。

「目」を閉じるという行為。

物理的に「目」を閉じていても、世界は見える。

見るという行為は、この場合、世界と触れる事を云う。

「目」で見えないもの。

いっぱいある。

感情とか、ね。

でも、目で見える。

物凄く俗っぽい言い方をすれば、

目で見えるものは、この世に存在する、全て。

存在って、難しい言葉だけど、ね。

今は気にせずに、私たちが考え得る全てって捉えればいい。

厳密に言えば違うけど、ね。

だから、心は見える。

勿論、身体も「見える」

「ああ、なんかあったなあ。実際に存在しているものと、本質的なもの。どっちが優れているか、っていう議論」

形而上学……。

「難しい言葉を知っているな。けいじじょうがく。初見じゃ絶対読めないな。意味も分かん」

でも、これはそんな難しい理論のお話じゃないのです。

「心と身体、だろ」

うん。

つまり、何が言いたいか……。

私は身体ではなく心で生きているんですよ。

「それはおかしい」

？

「いや、そのセリフがおかしいんじゃない」

「俺は身体ではなく心で生きているってどういうことって聞いたはずなんだけど、これの答えがそれじゃ、同じことを繰り返しているだけじゃないか」

うん。

だから言ったよ。

“でも、これはそんな難しい理論のお話じゃないのです。”

理論では同語反復はアウトかもしれないけど、でも、これはもっと簡単な話。

同じことを二回言う。

現代文の問題の解き方と同じ。

強調しているんだよ。

疑う余地は当然あるでしょう。

でも、

でも、ね。

身的なものより、心的なものを重視する。

私はずっとそうだったから、ね。

知ってるでしょ。

お兄ちゃん。

「廻子ってそういうヤツだったな。うん」

「身体的なものは、問題じゃない」

どうでもいいんだよ。

補足。

目で見えるものが世界。

では、目で見えないものは？

世界じゃないもの？

違うよね。

目で見えないものなんて、見えっこないから、知り得ない。

でも、一つだけ。

自分自身。

目は自分についている。

だから、自分自身は目で見えない。

他人の目から見えた情報を貰うことはできる。

でも、それは他人の色眼鏡を介して見た私だから。

私じゃない。

私の色眼鏡を通して、私を見ることは出来ない。

でも、それって、わりと普通に当たり前。

私の世界が私。

私が目を閉じれば、

私が消えれば世界も消える。

もちろん私の世界が、ね。

だから、私と世界は多分同じ。

世界の中に私はなくて、世界の外にも私はない。

だから、見えない。

鏡や写真を使わなければ、自分の体を「目」で見ることが出来ないのと同じように。

(鏡で反射した像は私自身ではなく、カメラで写した被写体も私自身ではない。)

くるっと身体を回転させた。

お兄ちゃんと向かい合わせっこだった身体は、お兄ちゃんと同じ方向に。

そして、座る。

お兄ちゃんのあぐらの上に。

「抱きしめていい？ 廻子」

「いいですよ」

ぎゅ。

私のよりも堅い手が腰、背中、肩、首と移動し、頭を撫でる。

ツインテールをほだき、手櫛で髪を梳く。

「んっ……」

抱きしめられて、髪を触られる。

うん。

いいね。

すごくいい。

「すんすん」

髪の匂いを嗅がれる。

私も匂いを嗅ぐ。

お兄ちゃんの胸に顔を埋めるだけじゃなくて唇が触れたのは内緒。

服の上からだけど、ね。

「それにしても……」

手櫛はそのままに、会話が続く。

「廻子の理論は、漠然してあんまりしっかりしてないな……。妥当性が無いというか。俺だからなんとかわかるけど」

う……。

それは確かに弱い所。

魅力的な言葉を追い求めるあまり、全体の調和という点で欠けているのは確か。

「廻子は科学とか得意じゃないからかな。論理的思考ってヤツ」

科学、ね……。

「そうだね。不登校だから、ね」

退学したので「不登校だった」が正解だな。正確には。

「そういやさ。昔は科学好きだったよな。廻子」

そんな時代もあった、ね。と。

「うん……」

「どうして？」

「何が？」

「廻子が科学嫌いになった理由教えて」

科学嫌い。

確かにそう言ってもいいだろう。

私は科学が嫌い。

でも、私は科学が好きだった。

もちろん今も、ね。

「わかった。じゃあ、話そうか」

その前に。

手櫛を一つ抱き寄せる。

がっしり、胸に抱く。

「なにしてるの？」

「当ててるのです」

お兄ちゃんの二の腕に私の膨らみが。

「う～ん」

膨らみが……。

「……」

「……」

膨らみかけが……。

「まあ……、女の子の身体はどこもかしこも柔らかいな。うん」

「わかりました。下着脱ぎます。再挑戦です！」

「やめろ……もういいんだ……」

ぐすん。

対話。

科学・非科学・「科学」

私が学校に行こうとしないのは科学が嫌いだから。

科学。といっても、学校で教えられているモノ。「科学」

テレビ番組に出てくるようなモノ。「科学」

正しさの根拠として求められる「科学」

それらが、嫌い。

だって、だってさ。

わからないじゃん。

それが正しいかどうかなんてさ。

科学。

科学理論。

正しいかを判断するのは実験。

あるいは実験を繰り返して得られるのが理論。

数学がそうであるように理論から現実を導くことも出来るだろう。

だが、総ての演繹は帰納に基づく。

何回繰り返しても同じ結果だったから、必然性を含んだ理論が生まれてくる。

でも、さ。

繰り返し回数は有限回なんだよ。

1回目はそうだった。

2回目はそうだった。

100 回目はそうだった。
毎回同じ結果になった。
じゃあ、その次は？
今日は太陽が東から昇った。
昨日も、一昨日も。
多分、古代から。
じゃあ、明日は？
ガラスのコップを持ってる。
地面に投げつけた。
割れた。
別の人と同じコップを持ってる。
地面に投げつけて割れた。
じゃあ、次は？
割れないかもしれない。
ガラスの鳥になって羽ばたくかもしれない。
西から太陽が昇るかもしれない。
科学とは、再現可能性。
だが、それはあくまでも可能性。
100%では、あり得ない。
この世には確実なんて無いし、確実を語るものは胡散臭いという、ね。
私が、多くの場合触れてきたのは確実性を語る「科学」。
確かさのメタファーとしての「科学」。
所詮近似でしかないのに、なんで、なんで、
それを語るんだ？
地球は青く、そして丸い。
色はともかく、球体であるというのは認めない。
多分、ロケットに乗って宇宙に行ったら球体に見えるんだろう。
でも、平面にも見えるから……ね。
私は科学万能説を批判する。
「科学ある程度万能説」なら信仰に値する。
科学の非確実性、反証可能性に惚れたのに……。
まったく、学校で語られる「科学」はつまらない。
科学は皆のものじゃない。
個人的な、ね。
私の科学。

だから、私の話は「科学的」ではないけど、科学、だから。

「科学」で理解しても無駄。

論理的必然性は持ち合わせていない。

まあ、論理大系を新たに作るというのもアリだけど、今はしてないから。

論理的必然性ではなく、感情的運命性で。

運命とは、これまでの偶然から起こった必然的結論。

昨日の出会いが偶然。でも、今日の選択は必然だから。

私の、私だけの科学。

そして、生命の樹。

「少しおかしい」

「まず、世間一般的に言われている科学は廻子の言う科学に当てはまらない。それはわかる」

「だが、廻子の言う本当の科学は必然性の保証こそしないが、妥当性を語るのではないか？」

「廻子の色眼鏡論、生命の樹の根系統樹説、それらに妥当性はあるのか？ いや、廻子自身が認めている。そんなものない」

う、うぐう。

「でも、魅力的な話なのは確か」

「だから、廻子のそれは科学と呼ばずに理学と呼んだらいいんじゃないかな？」

理学……。

「そう、理だ」

うう……ん。

ちょっと待って。言葉の定義をもう一度確認します。

科学

→ある場合においてある程度の妥当性を保証する理論、というより言明。

「科学」

→確実性を保証する言明。

科学は論理的必然性を保証しない。

「保証を『100%確かであることを示す』と定義すればそうだな」

感情的運命性……。

「その意味が分からんな。感情的とは何か？ 運命とは何か？」

……。

ああああ————。

うん。

議論を急ぎすぎたみたい。

感情的運命性はちょっと置いておく。

この対話の結論は、

私の不登校の理由を説明するモノ。

学校で教えられるのは「科学」

私が愛したのは科学。

その二つの違い。

私、ダメなものはダメだから。

「理解。納得。その上で批判」

『『科学』は科学の中に入らないのか？』

どうということ？

「科学は再現可能性。妥当性を保証する」

「しかし、反証可能性。コンマ数パーセント、僅かに存在する可能性。それがあから科学は確実ではない」

「でも、科学は確実性を語ることもある。0.999... = 1 でもあるように。それを認めたら、科学は確実である」

「1回目はそうだった」

「2回目はそうだった」

「100回目はそうだった」

「毎回同じ結果になった」

「だから、明日もそうなるだろう。多分、確実に」

「それは廻子の言う『科学』になるだろう。でもオレは、どうしても科学だと言いたい」

むむむ……。

私はそれを科学と言いたくないんですよ。

「うーん……」

「それはひとまず置いておこう。オレの話を理解はしてくれたと思う。納得はしてないっぽいけど」

うん。

「オレの言う科学はそんなものだと理解した上で、話を続ける」

「廻子の個人的な科学という言葉はもっと魅力的だな」

「なんとなく意味深で、カッコイイとってしまう」

「でも、違っただろ。当たり前だけど。科学はそういうものじゃない。個人的じゃなくて、集団的、公的、一般的なものだ」

「廻子が定義した科学は範囲が広すぎる。それはもう科学と名付ける意味が無いんじゃないか？」

「だから俺は提案する。理学という言葉を」

「その名の通り『ことわり』という意味。もうちょい具体的に言うと、廻子の言う科学と『科学』が含まれる」

「だから、廻子は科学者ではなく、理学者だ」

納得出来ない……。

すごく。

むむ……。

ひとまず対話終了。

「ふう……。ずっとくっついてるとあついね」

「暑い、熱い、アツい。どれでも当てはまるな」

「嫌じゃないけど、ね」

「俺も」

ずっと離れる。

名残惜しくはない。いつでも出来るから。

「廻子すっぱー細いけど、それでも柔らかいんだな」

「すごくセクハラ……。でも言いたいことは分かります。女の子ですから」

「男女の性差ってやっぱりあるんだなあ。顔おんなじだけど」

「そうですよ。脂肪が多いのは女の子の武器であり嘆きでもあります。胸とか」

「……」

……。

「お胸様を見た後に目をそらさないで下さい」

「来世があったら来世に期待」

「そんなあるかどうかわからないものに期待するより今ある幸せを楽しんで下さい」

「えいつ」

ペタッ。

「お兄ちゃん、私の胸に置かれたこの手は何ですか」

「今ある幸せ。感じる。物理的接触で」

「最初に言いましたよね。こういうのナシだと……」

「オコノコは幸せになりたいんですよ、ね」

「私の真似しないで下さい」

「俺に幸せになるなと言うのか？ 俺はお前を幸せにしたいと思うぞ」

「くっ……って騙されませんよ！」

「ダメか……」

「騙されないけど……」

手は離さないんだよね。

「はあ、もういいです。どうぞご自由に」

「ま、マジで！？」

「ぷいっ」

つーん。

.....

.....

.....

...

本当に触り続けやがった……。

それも一時間以上。

「ぐへへ〜」

近い。

凄く近い。

あれからしばらくして、外に出てきた私たち。

なんですかこれは。

横に変態がいるのは危険。

距離を取る。

さっと近づいてくる。

距離を取る。

さらに詰めてくる。

距離を……取れない。

もう道の端っこまで来ちゃった。

距離が近い、そういう関係だけど……。

さっきまでいやらしい手つきで胸を蹂躪してきた人だから、ね。

「廻子よ、なぜ離れようとするのですかぐへへ」

「ぷいっ」

顔を背ける。

「ぐへへ……怒った顔も可愛いよぐへへ」

ぐへへうるさいよぐへへ。

定位置。

お兄ちゃん。

の膝の上に私。

膝、というより、全身。

お兄ちゃんに包まれて私。

そして胸も……。

「なんでまだ揉んでいるんですか！」

後頭部アタック！

「ぐへっ」

お兄ちゃんの鼻に直撃。

「いたた……廻子をご自由にして言ったから……」

「言ったけど！ けど！」

「けど何だ？ ハッキリ言わんと分からんぞ」

「なんで偉そうなんだよ……、分かりました。私がいいって言うまで触っちゃダメです」

「なんでだよ！」

「なんでキしてるんだよ……」

「なんでもだよ！」

「なんでもって何だよ……。ふう。いいから、わかった？ お兄ちゃん？」

「仕方ぬうわいなあ。廻子が言うんならあ」

しゃべり方がキモい。

なんで私こんな人の事……。

……なんてね。

「お兄ちゃん、大好きだよ」

「……急にどうした！？ もっと触ってもいいというお触れか？」

「だーめ。この手は落ちないように私を抱きしめて、ね」

生命の樹。

何度も来た場所。

私が不登校になった原因を作った場所。

私にとっての、科学の場所。

そう、科学。

お兄ちゃんは科学とは言わないけど。

でも、私は。

ともかく、生命の樹。

心やすまる場所。

見えるものを見に行きたい。

行きたいんだ。

さあ。

もう十分なはず。

おんなじになって、認めた。

だから、お願いします。

呼吸。

吐いて、吸う。

坐禅をイメージした所作。

しかし、坐禅のようなきっちりしたやつじゃなくて、だらんと、背筋曲がっている。

背中のは後ろには、お兄ちゃんが。

ぎゅって、抱きしめてくれている。

吐いて、吸う。吐いて、吸う。

吐いて……。

「廻子」

「何？ お兄ちゃん？」

「急ぎすぎ。焦りすぎ。ゆっくり、ゆっくり」

「ふう……ごめんね。ありがとう」

言われて気がついた。

求めすぎではいけない。

そう、求めなくてはいけないものは、私は求めない。

手を伸ばせば届く。

そういうものに手が届かなかった私だから。

だから。

祈るわけでもなく、

願うわけでもなく、

乞うわけでもなく、

信じるわけでもなく、

想うわけでもなく、

拝むわけでもなく、

歌うわけでもなく、

ただ、見てる。

そして見ることも止め、あるがままの心へ。

一つ、呼吸。

吐いて、吸う。

一呼吸目で立ち上がる。

二呼吸目で木から降りる。
三呼吸目で木から離れる。
四呼吸目でもっと離れる。
五呼吸目でもっともっと離れる。
六呼吸目でもっともっともっと離れる。
七呼吸目でもっともっともっともっと離れる。
八呼吸目でもっともっともっともっともっと離れる。
九回目。息を吐いて、世界の果てまで辿り着く。
吸って、この場所に戻ってくる。
十回目。息を吐いて、生命の樹の樹冠に登る。
吸って……、

99.99...

音がした。
脚を動かし歩き出す。

足は、地面を。

足は、天を。

地に足の着いた——

天に足の着いた——

ひたすらの美しさとしての天球空間へ。

でも、

全てが美しい世界では、

美しさの意味が無くなるんだよ

、ね。

天球少女と生命の樹 『五』

はい。はい。ヒカルです。みんな忙しい11月です。あはは。なんてね。オレはそんなに忙しくねえよ。全てオレの怠慢が導いたクソだよ。まあ、ね。課題を事前にやっておくとか、試験勉強を前もってやっておくとか、出来ないのは仕方ないね。あはははは。ヒカルでした。

こんにちは、マウスです。レポートレポート小テストレポート、みたいなクソツたれライフを満喫している真っ最中です。その影響は、まあ今回のページ数でよく分かりますね。副作用なく24時間戦える薬欲しいなあ。副作用なく、でありクスリでもありませんよ。仮に出来たとして学生が手軽に手に入れられる代物でもないでしょうが。小説、来月は頑張ります(毎月のテンプレ)。

こんばんは、鴫和です。おやすみなさい。すやあ

なぜ小説の続きではないのか。それはもう仕方がなかったからです。知らない人には何を言っているのかわからないアレなコラムですが、興味が湧きましたら来年の冬にリリースされる(はずの)BF5を、どうぞよろしくお願い致します(ダイマ)